Ⅳ-70　街並構成に関する比較文化的研究

電力中央研究所　正会員　山本公夫
東京工業大学　正会員　中村良夫

1　はじめに

明治以降、日本の都市空間は近代化の過程において諸外国から種々の影響を受け、世界の諸都市と類似した都市景観を有しているが、その中にも日本独自の都市や道が存在する。これまで街路景観・歩行者空間に対して各方面から研究されてきたが、ほとんどは現代都市空間を対象に計量心理学や歴史的町並保存等によるアプローチが主流を占めている。それに対して、本研究では街並構成に関して伝統的道空間の特質を歴史的形成過程の中で抽出し、さらに形態と意識の関係を意味論的考察によって把握する点に特徴がある。

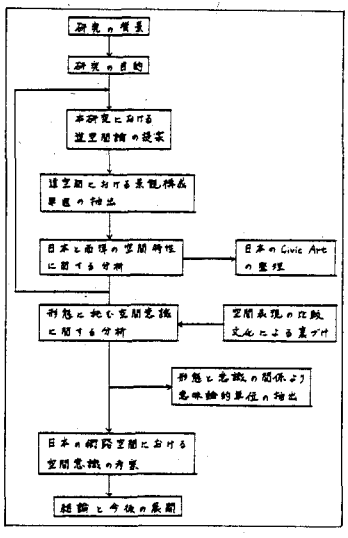
2　研究の目的と構成

本研究の目的は、景観工学の立場から日本の都市空間の持つ伝統的な道の文化を、街並構成における形態と意識の関係から明確にすることである。具体的に、この目的に従って研究を進めていく上で、段階的に派生するアウトプットが必要となるので、それぞれの目的について以下に説明する。

① 道空間論の提案と有効な景観構成要因の抽出
② 日本と西洋の道空間特性及びCivic Artの抽出
③ 形態に替む空間意識及び意味論的単位の抽出

以上の目的を達成することにより、現代の街路空間におけるこの歩行者文化の重要性を示唆する。

本研究の構成に関しては、右図の研究のフローに示す通りである。

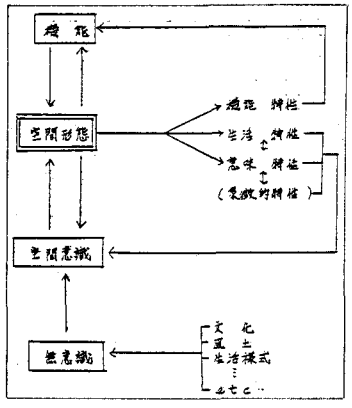


図－1　研究のフロー

3　道空間論の提案と景観構成要因の抽出

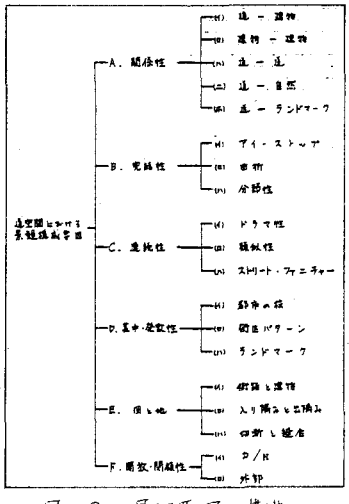
本研究において基礎となる独自の道空間論を、形態意識の関係に関連する従来の道空間論を検討した上で提案する。まず、既存の研究・文献等を道空間の三つの概念（機能・意味・生活）とアプローチ方法に従って分類し、本研究の立場を明らかにした結果、道空間を意味空間としての概念の中で捉え、伝統的都市空間を意識レベルで考察するという観点から系譜的及び意味論的にアプローチすることとした。

道空間の持つ特性には、機能・生活・意味さらに象徴的特性が存在し、それらの複雑な絡み合いの中で空間形態を決定する機能及び空間意識が形成される（図－2参照）。空間意識とは、言語と類似した性格を有しており、歴史的変遷の中で激しく変化する都市空間や生活様式において、それぞれの国や種族によって異なり、潜在的に存在する空間に対する意識である。



図－2　形態と意識の関連図

日本の伝統的道空間における空間形態を心理的側面から表現するためのキーとして、提案された道空間論に従って右図に示すような景観構成要因のヒエラルキー構造を抽出した。



図－3　景観要因の構造

4　道空間特性に関する分析と考察

日本の道空間における形態的特性を抽出された景観構成要因に基づいて、西洋の道空間との比較定性分析によって明らかにする。分析対象に関しては、まず道空間の持つ伝統的な空間特性を端的に表現し、しかも純粋で抽出できる時代について考察した結果、現代都市空間の原型として最も成熟した空間形態を有する日本の近世及び西洋の中世都市を対象とした。実際の形態比較における分析対象としては、それぞれの時代の視覚情報媒体と言える古地図・絵画・写真等を約500点ずつ集収した。

抽出された景観構成要因に従って、集収された視覚データについて比較定性分析を行なった結果、日本と西洋の道空間特性を明らかにすることができた。たとえば、道と建物の関係性について比較分析を行なうと、日本の道空間を特徴づけるのは、軒下や塀といった内部とも外部とも区別のつかない「ま」の空間であった（Fig.1参照）。それに対して、西洋の都市空間には「ま」の空間が存在せず、建物のファサードが直接街路を囲む壁として存在し、さらにドアや窓に装飾を施す点が特徴的である（Fig.2参照）。

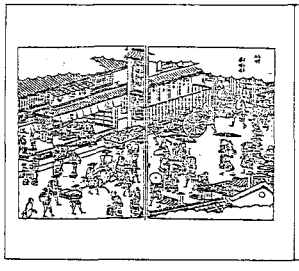


Fig.1　日本

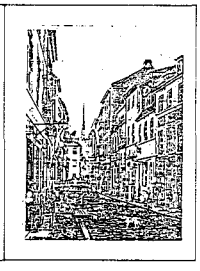


Fig.2　西洋

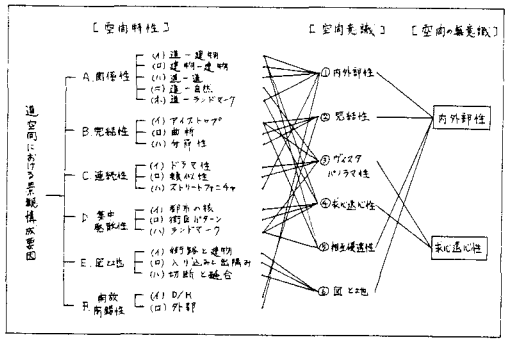
また、以上の定性分析過程において、当時各々の国が持つ道空間技法及びデザインエレメントをCivic Artとして体系的に抽出した。Civic Artとは、都市の装飾的部分において理解され、都市の歴史的変遷の中で理想と現実とを結ぶジョイントの役目を果たしてきた。

5　道空間意識に関する分析と考察

日本と西洋の道空間特性から形態に替る空間意識を推察した結果、図－4に示す6つの空間意識を抽出することができた。たとえば、内外部性についてみると、建物と道の関係における「ま」の空間の存在が、観察者に対して建物の内部を象徴する空間として意識させ、同時に自分が外部にいることを自覚させる要因の一つとなっている。また、これらの空間意識の根底には、その国の文化・風土・生活様式等が存在していると考えられる。

明らかとなった空間意識と空間形態との関係を、さらに関係の構造の中で鮮明にするために、記号論の立場から意味論的単位の抽出という形式によって明確にする。意味論的単位とは、道空間のもつ空間技法やデザインエレメントが観察者に対してどのような意味性を与え、それを知覚しているかを表現する記号、すなわち言語を指すものであり、実際には内部・外部・自然・人工・信仰・連続象徴としてエレメントを抽出した。たとえば、内部象徴としては軒下の空間やモニュメント等が挙げられる。

これまで日本と西洋の比較の中で空間特性と空間意識の関係を明らかにしてきたが、さらにこれらの空間意識に潜在的に存在する「空間の無意識」の抽出を試みた結果が図－4である。すなわち、日本の道空間においては外部意識と遠心性という二つの「空間の無意識」が存在すると考えられる。



図－4　空間特性と(無)意識の関係

6　結論

以上の結果によって、日本の都市空間における伝統的な道の文化を、街並構成に関する形態と意識の関係において、六つの空間意識とさらに二つの空間の無意識という形で明らかにすることができた。今後の展開としては、人文・社会学からのアプローチ、さらに現代の街路計画への適用等を考察する必要がある。